

蘇芳集

今日のうち

青山

丈

父の日のポテトチップを散らかしぬ
蓮の葉を見に來ただけの日が落ちる
見に行かないと紫陽花でなくなるよ
片陰の花屋が椅子にかけてをり
今日のうち近くの夏至を見なければ
店口の青鬼灯の花屋かな
転た寝もあり広島忌長崎忌

森確か

野路斉子

穂草いろいろ花屋の花を遠巻きに
秋彼岸雨の向かうに森確か
豊の秋食堂の置く体重計
吾の他に誰も居ぬ鴟の夕高音
だんだんに大きな辞書を夜は長し
釘と云ふ釘きつちり嵌めて冬
知つてゐて森の落葉は誰も掃かず

頬杖

前田陶代子

膝の上に開く歳時記けさの秋
誰も荷を提げ原爆忌の電車
ひと葉して水辺りといふよき日向
池畔とふ風聴くところ蘆の花
ぐんぐんと日の坂秋の百日紅
汗が目に沁むよ八月十五日
頬杖にももの思ふ露の夜なりけり

新涼 峰岸よし子

新涼や人住むところ灯のこぼれ
ぶだう食む自問自答のひとつひとつ
身のどこか引き潮めきぬつくつくし
ありなしの風にふりむく魂迎
魂送り弦月に雲かかりけり
父の忌や爽涼と雲はなれゆき
父の忌の八月禱ること多し

遠き瀬音 宮尾直美

八月の齡ことさら重くあり
立秋の風は海より父の墓
働くは罪かもしれない秋の虹
旅の荷に加へて持たす黒葡萄
雨つづく秋のうしほのうねりかな
きのふより遠き瀬音や桐一葉
秋の蝶ひらひらと来てすぐに消ゆ

夏の果 八木下末黒

水に来る四五羽のすずめ大暑かな
りりりりと夜釣りの当り橋の上
広島忌水をかぶつて朝湯でる
縄文の遺跡にシート蚊喰鳥
月残る空のむらさき朝涼し
川風や川沿ひをゆく夜の秋
魚跳ねる音の時をり夏の果

さかしらな言葉 吉田幸敏

夜の窓の開けあるらしき秋隣
さかしらな言の葉あふれ秋に入る
酸漿の鳴りだす海の暮るるとき
つまべにや小さき音立つ皿小鉢
穂水奔らす水口の草刈つて
秋雨前線後ろ手に畦の人
仏間への戸をあけ放つ稲の花

秋 風 小川美知子

森を描く少女がひとり夏休
夏ゆくと木立の風ほどの会話
少し育ち秋の金魚となつてゐる
小鳥来て今日は出かける鞆かな
しんがりにつく秋風の乳母車
秋風や橋の向かうが灯り出す
水飲んでゐて秋風と思ひけり

木隠れに 木内憲子

何某の詩碑木隠れにけふの秋
地に墜つる一縷の水も秋あらた
日向鎮めて八月の水すまし
またとなき処に水の湧きて秋
人ごゑを離るるときや油点草
曼珠沙華辺りのひとり二人かな
汀女忌の夜の身ほとりを正しけり

言 訳 小島みつ如

朝涼し齒ごたへの良きハートパン
夏水仙の色香ただよふ朝の庭
夏水仙群れ立ちバレリーナのごと
数日は庭のシンボル夏水仙
晩夏競技鋼の脚のひかり飛び(パラリンピック)
門扉とづ夏水仙のまだ暮れず
娘にむかひ言訳などを夜の秋

廃 屋 清水裕子

渡舟待つ胸の高さに秋の風
押して出す舟底の跡浜に秋
廃屋に秋の薔薇咲く紅を濃く
終戦忌地表の乾き眩しめる
秋風や古本市に荷の屈き
うなぎ屋に客僧のゐる木歩の忌
醉芙蓉雨滴まみれに閉ぢにけり